



ラ・ロッシュ夫人の文学活動について：
『シュテルンハイム嬢物語』を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010021

ラ・ロッシュ夫人の文学活動について

——『シュテルハイム嬢物語』を中心に——

星野純子

18世紀半ば、市民社会形成の過程で、それまで文学の正当なジャンルとしては認知されていなかった小説が、この市民社会を映すものとして今までにない重みを持つようになりました。しかし、バロックの宮廷、歴史小説の遺産をうけつぐいわゆるギャラントな小説は品のない色事、陰謀、ギャラントな冒険などを扱って、その道徳的いかわしきの故に、単なる娯楽的性格しか担うことができず、悪漢小説（ピカロロマン）の伝統に連なる、冒険、旅行小説も、新しい読者層の要求に応える事は出来ませんでした。官吏、医者、牧師、学者、商人、地方貴族など、それに彼らの妻や娘という、新しく読者として登場した教養市民層は、身分や財産によってではなく、自らの功績と能力で自分の地位を築き、自己意識を培っていかねばならず、精神性や教養、学問を重視し、そのよすがとなる新しい道徳と、時代にふさわしい理想を説いてくれる新しい読み物を求めていたからです。まずこのような市民層の心をとらえたのはこのころイギリスから伝えられた各種の道徳週刊誌でした。道徳的な物語、寓話、仮構の手紙、対話、風刺、エッセイなどを寄せ集めた週刊誌は、啓蒙主義市民道徳を教会に代わって世俗化した形で広めるのに役立ち、特に女性の間では約半世紀にわたり、影響をもちつづけました。さらに同じくイギリス、また、フランスに端を発する、Richardson, Prévost, Marivaux などの市民小説、道徳、教訓小説は、教訓的傾向としても、テーマ、モチーフ、スタイルとしても、道徳週刊誌と共通のものがああり、市民層の読者に喜んで受け入れられ、やがてこの影響のもとにドイツ

でも新しい市民小説，例えば，Gellert の『スウェーデンのG伯爵夫人の生涯』¹⁾ (1747—1748) などがうみだされます。

しかし，読者は Gellert のように徳を単に抽象的に描写することでは次第に満足しなくなり，自分も事件に内的に関与し，登場人物と一緒に感動し，試練にさらされる人物の運命に，理性だけでなく心や感情によっても，かかわりあえるようなものを求めるようになります。小説の内容の重点が，偉大な人間の英雄的な行為や未曾有の冒険行為ではなく，読者と同じような普通の人間の行動とその私的な感情，内面を描くことへと移行し，しかも，感傷主義 (Empfindsamkeit) の風潮の中で家庭や家族という，女性の日常生活経験の領域が小説のテーマとなってきたのです。

また教養市民層のあいだでは，このころ，男性にも女性にも書簡の交換が最も重要な関心事となっていました。人々はあらゆる機会をとらえて手紙を書き，散歩の時にも地面に立てておけるようなインキ壺を持ち歩く程で，手紙を書くことがすなわち生活の内実となってきました。ニュースを伝達するための通信手段としての手紙が，心情の披瀝や魂の模写を第一の目的とするように機能変化をとげていく中で²⁾ 女性の果たした役割は大きいものでした。男性の手紙に用いられていた従来の荘重で形式的な美文調の官庁語法は無味乾燥で生気に乏しく，親密で私的な真情を率直に表わすのには不向きであり，外来語の多用やギャラントなフランス趣味は飾りすぎだと評判が悪く，自然さ (Natürlichkeit) と，生き生きしていること (Lebhaftigkeit) がよい手紙の判断基準となりました。「よい会話の自由な模倣」がよい手紙の条件だとされました³⁾ が，これならば，これまで公的生活からは排除されていた女性が常にやってきたことでした。さらに書簡というものはそもそも相手とのかかわりなしには成り立ち得ませんから，私的であるとはいえ，コミュニケーションと自己表現を自由になし得る，半ば文学的なメディウムとなったのです。多くの女性が意識的に手紙を書き始めたということは，カモフラージュされた形で女性が文学創造にかかわりだしたということでした。さら

に、美学的に劣ったジャンルとみなされていた小説はそれだけ形式的制約をうけることが少なく、イギリスでは、Richardson が、よい手紙を集めた、模範書簡集から、『バメラ』、『クラリッサ』などの書簡体小説(Briefroman)という新しいジャンルをつくり、ドイツでも熱狂的に受け入れられます。この書簡体小説という形式は、体系的学問の訓練をうけられなかった女性が気おくれを感じずに入ってゆくには好都合な創作の世界でした。彼女達は Briefroman という形式をいわば「トロイの木馬」⁴⁾として文学創作を始めたのです。

以上のように18世紀中葉は、テーマとしても、文学ジャンルとしても、また、文体という面からも女性の文学創造に好都合な条件がそろった時代であったといえるでしょう。Touaillon は「小説が家庭をその素材に、書簡をその形式にしたとき、芸術は女性に近づき、ドイツの女性小説 (Frauenroman) は成立したのである。」と述べています⁵⁾。ドイツで初めての Frauenroman といわれる『シュテルンハイム嬢物語』はこのような状況の中から生まれました。

作者の Marie Sophie La Roche は、1731年に、医者で後に Augsburg 大学の医学部長となった Georg Friedrich Gutermann の長女として Kaufbeuren に生まれ、ピエティズムの敬虔さと合理的啓蒙主義の雰囲気の中で育ちます。彼女は三歳で字をおぼえ、五歳で聖書を読んだというほどの聡明な子供でした。当時の上層市民階級の常として、カテキズム、ダンス、フランス語、ピアノ、絵、料理、刺しゅう、家事などは一通り習得しますが、系統だった教育はうけず、家庭内で父や父の同僚で後、婚約者となる Bianconi から芸術史、歌、数学、イタリア語を学びます。16歳年上の Bianconi との婚約はしかし、宗教の違いから父親の厳命で破棄され、父は手紙、楽譜など婚約者から貰ったものをすべて焼き捨てさせ、彼のポートレートにはさみで切り刻み、指輪はうちこわさせるというほど徹底的にこの愛情に終止符をうたせます。19歳になっていた Sophie はその後しばらく親類で Biberach の牧師 Wieland に預けられ、ここで二歳年下のいとこ、Christoph Martin Wieland としりあい、まもなく婚約しました。しかし、

Erfurt, Tübingen の大学で学んだ後, Zürich の Bodmer のもとで詩人になろうとしていた Wieland は愛を語る熱烈な手紙を送りはしても, 結婚は具体的な射程には入ってきません. 結局, Sophie は父親の再婚という事情もあり, 1754年, 23歳で, 22歳年長の Georg Michael Frank La Roche と結婚します. この結婚により彼女は夫の仕える Stadion 伯爵のもとで宮廷生活を送る事になり, 生まれ育った市民の家庭とは全く異なる, カトリックの宮廷生活を経験したことが, 新たな視野を広げ, 彼女の創作を決定づける要因となります. 啓蒙貴族である伯爵に従って, Mainz で, 後には領地の Warthausen で, 彼女は有能な社交婦人として公の社交儀礼の義務を果たす以外にも, 毎日, 伯爵の散歩のお相手をしてさまざまな書物から得た知識をもとに話題を提供したり, 夫の要請で英語を習得して英国やパリとの通信を引き受けたりと, 子供が生まれてからも, いわゆる市民的な家族中心の生活からは程遠いくらしを送ります. さて, 1768年に Stadion 伯がなくなり伯爵家に疎んぜられた夫の La Roche は辺ぴな Bönnigheim に役人として追いやられます. 一方, 彼女は1760年ごろから物語や逸話などをてがけていましたが, ここに移って娘たちを寄宿学校に入れたための寂しさをまぎらわし, またにぎやかな社交生活がなくなったための空虚さを埋めるべく, ゆとりのできた時間を使って小説を書き始めます. これが『シュテルンハイム嬢物語』(1771)⁶⁾で, 出版と同時に非常な評判を呼んで版を重ね, フランス語, 英語, オランダ語, ロシア語に翻訳され彼女の名前は外国にも知られるようになりました. こうしてラ・ロッシュ夫人は作家としてのキャリアを始めたのですがこの時, 彼女はすでに40歳になっていました.

この小説は, tugendhaft で感傷的な少女 Sophie von Sternheim の受難と幸福な結婚に至るまでの物語で二部から構成されています. まず第一部では, 主人公 Sophie の生い立ちと宮廷世界との対決, そして敗北, 卑劣な悪漢 Derby との偽装結婚が語られます.

早くして両親をなくした Sophie は叔母の伯爵夫人にひきとられるが,

叔母夫妻は自分達の訴訟を有利に運ぶために彼女を侯爵の側室にさし出すつもりでいる。宮廷文化に嫌悪をおぼえた Sophie はその悪徳や誘惑に反抗するが、かえってそれが新鮮な魅力となって宮廷人の賛嘆をよびおこし、さらにイギリス大使の秘書として宮廷に滞在していたメランコリーな、夢想的で感傷的な青年貴族 Lord Seymour の心をとらえる。彼女の方でも彼に共感をおぼえるが、Seymour は伯父の大使に釘をさされているため、彼女に近づけず、遠くから Sophie の Tugend が試練や誘惑にうちかつようと願うのみである。Sophie はその毅然とした態度にもかかわらず、宮廷ぐるみの陰謀の中で誤解を招く行為が重なり、まもなく、侯爵の愛顧を受け入れたといううわさが流れるようになる。仮面舞踏会の夜、侯爵から贈られた衣装をそれと知らずに身につけてあらわれた Sophie に、仮面に顔をかくした Seymour が近づき、彼女の墮落をなじる。すべてを知って絶望に陥った Sophie はこのわなをのがれる道を求めて、同じくイギリス貴族で前々から Sophie を手に入れようと策をめぐらせていた悪党 Lord Derby との結婚を受け入れてしまう。彼は召使に牧師を演じさせて偽りの結婚式を挙げ、彼女にはひそかに町を離れさせる。しかし彼はすぐにとりすました Sophie に愛想をつかしてしまい彼女を捨ててイギリスへ帰る。

第二部では Derby からの手紙で真相を知った Sophie が悲嘆にくれながらあちこちさまよい、二度、三度とおそいかかる試練を克服するさまが描かれます。

友人のもとに一時のがれて、当座の絶望的な悲しみをどうにか脱した Sophie は Madame Leidens と名をかえて、ある裕福な婦人のもとで村の少女たちのための一種の職業学校を作ったりという慈善活動に自分の生きる意味をさがそうとする。その後、温泉旅行で知り合ったイギリス婦人 Lady Summers に要請され、同様の活動を行うため一緒にイギリスに渡り、しばらくは平穏な生活を送り、隣の領地の教養ある紳士

Lord Rich に求婚されたりもする。しかしまたまた偶然にも、Lady Summers の姪の結婚相手が悪党 Derby だったため、Sophie は、悪事の発覚を恐れた彼に誘拐され、スコットランドの鉱山地帯に幽閉される。一時は気を失い、死を願った彼女だが、やがて「この最後の日々を高貴な *Gesinnung* で満たし、ここでも善を為し得るものかどうかためてみよう」と決心して、見張り役の貧しい坑夫の家族の心をつかみ、人間的な関係をつくりだすことに成功する。Derby の再度の求婚をはねつけた Sophie は地下牢に閉じ込められ、今度こそ死は確実なものに思われたが、同情した人々に助けられて、近隣の貴族のもとにかくまわれ、Derby には、彼女は死んだと、偽りの報告が送られる。さて、重い病にかかり、死の床にあってようやく後悔の念にさいなまれた Derby は、Seymour と、彼の腹違いの兄であることが判明した Lord Rich とに自分の悪事を告白し、Sophie の墓を訪れるためにスコットランドに赴いた二人は、無事救われていた Sophie と喜びの再会をはたすのである。兄は年若い弟のために、Sophie を譲り、はれて Lady Seymour となった Sophie は理想的な妻として夫の領地経営を助け、Lord Rich は、間もなく生まれた甥の名付け親兼教育係として、かたわらで静かに彼らの幸福を見守るのであった。

さて、このようにざっとあら筋を見る限りでは、待ち伏せ、変装、Tugend への疑い、誤解に基づく恋人達の離反、幽閉、死んだと思われた人が生きかえるなど、また、身分の高い人により少女の Tugend がおびやかされたり、偽りの秘密結婚や悪党による誘拐などのパターンやモチーフを道具立てに、偶然の積み重ねで筋が展開されるという具合に伝統的な小説の手法を踏襲していますが、その描写の仕方にはまったく新しいものがありました。小説の最後で Lord Rich は Sophie の日記や手紙を読んで、「何という魂がここには描かれているのでしょうか」(s. 292) と感嘆し、Sophie 自身も「どうぞこの、あなたが私の魂の原型とお呼びになったものを、愛情に満ちた純

粹な友情の担保としてお受け取り下さい」(s. 293)と言いますが、このように、徳高い女性が数々の苦難や障害に打ち勝つ過程を内面的な魂のプロセスとして詳細に描き出したのは全く新しいことでした。Goethe が『フランクフルト学芸評論』で「…………もし本を批評しているのだと思っているならばその人達はまちがっています…………これこそ人間の魂なのです…………」⁷⁾と絶賛したのもこういう点についてでした。

この小説は精確には、『シュテルンハイム嬢物語』というタイトルに「オリジナルな記録と、その他の信頼すべき文献からの、彼女の友達による抜粋」という副題をつけ、作者の名はふせ、Wieland 編として彼の序文と脚註つきで発行されました。読み始めるとすぐにこの友達というのが Sophie の侍女 Rosina であることがわかりますが、彼女が虚構の編者となって、Sophie, Seymour, Derby の書簡, Sophie の日記, 手記に適宜, Rosina 自身の説明をはさみこんですきまを埋めまとめあげたものを、友人にあてて書き送るというかたちになっています。そしてこの全体に、さらに Wieland が作者のラ・ロッシュ夫人あての手紙という体裁をとった序文と脚註をつけて、どこまでがフィクションかわからないような形で発行され、作品の真実性を高めています。Richardson をモデルにはしていますが単に彼の手法を模倣するにとどまってはいません。全体を見通せる位置にある著者が時々顔を覗かせるということではなく、主人公と行動を共にする侍女に編者の役割を与えることで、常に筋は読者の目の高さで展開し、また、返信は一切省くことで、手紙の受け手の役を読者にひきうけさせ、読者の物語への参加をひきおこすという効果をあげています。

さて Wieland は創作の逐一の過程にかかわって細かい忠告や指示を与え、文法的あやまりやシュヴァーベンなまりをなおし、人物造形や構成を助け、作品完成の推進役をつとめました。彼の序文はこの作品の理解を助ける、一個の独立した文学批評といえるほど質の高いものになっています。まず彼は、ラ・ロッシュ夫人がこの作品を文学的野心から、妻、母としての義務をおろそかにして書いたものではないこと、出版も彼女の知らないうちに

——これは事実に反することなのですが——なされたのだと弁明し、意識的にシュテルンハイム嬢とラ・ロッシュ夫人のイメージをだぶらせることで世間の女性に対する偏見をかわそうとし、続いて、徳の鼓吹という道徳的教育的意図のもとにこの本を出版したのだとくり返し強調します。さらに、文法的逸脱や洗練されていない語法など文体上の欠点に気づかないわけではないと、保守的批評家の批判を予防しておいて、それに勝る内容の価値の方へと目を向けさせ、「魂のかぎりのない率直さ」(s. 7) を称賛してこの作品の *empfindsam* な魂の告白という要素を指摘します。この小説が非常な反響を呼んだのは、これが古い要素と新しい要素の両方を含んでいたために、読者の保守的な層と進歩的な層の両方を満足させたということにあります。芸術は教訓的で有用であるべきだという啓蒙主義の世界観と同時に、新しい感情優位の文化が要求する飾りのない魂の告白とがこの小説には混在しており、*Wieland* の序文は、正しくこれを指摘したのですが、作品のもつ新しさを熱狂的に受け入れた *Sturm und Drang* の若い世代はこの *Wieland* に猛烈に反撥します⁸⁾。実際、一個の成功した文芸批評ともいえる彼の序文はともかく、幾つかの脚註の方はしばしばこっけいな感じさえうけるほどの、言わずもがなの教訓や俗物根性が顔をのぞかせています。例えば、悩める *Sophie* の美しい姿に刺激された *Derby* が力づくで服をぬがせようとする、この小説でただ一ヶ所のエロティックな場面がありますが、ここに *Wieland* は「なんと厚かましい！ *Derby* さん、あなたはもっとゆっくりやることはできなかったんですか……」(s. 190) と、半ばふざけた調子の脚註をわざわざつけています。「俗物の仮面の下でギャラントなロココの詩人が笑っている」⁹⁾ こう言う不協和音に彼らが反感を示したのは当然と言えるでしょう。

この小説はしかし、そのような学者、批評家に評判をよんだだけでなく、もっと大衆的に読者を獲得したことが、最初の15年間に5回も版を重ねたことからわかります。恐らくはたくさんの女性読者が内容と人物像の新しさに共感し、感情移入して読んだことでしょう。敢然と陰謀に立ち向かい、運命

に打ち勝って、自力で愛する男を手に入れた主人公の実行力、活動性、自己主張は、それまでの男性作家の手になる受動的で生気に乏しい女性像とは全く異なったもので、同性であればこそ描けた姿でした。ありきたりの理性結婚をのがれられない普通の女性はここに自分達には拒まれている望みが実現されるのをまのあたりにしたのです。

しかし、ラ・ロッシュ夫人がこの小説に与えた道徳的枠組は基本的にはそれほど革新的なものではありませんでした。精神を啓蒙し、感情と道徳を美化したいという要求は男女とも同じではあるけれども、その実行においては男女特性のちがいが自然により定められているのだと、女性の要求にたがをはめ、その要求にそった教育のプログラムを考えるのです。とはいえ、後のラ・ロッシュ夫人の作品がこの女性教育という一点に集中してますます道徳的、教訓的色彩を濃くし、現実と妥協的になっていくのに対し、この作品では、小説の虚構世界に、現実をつきぬけた自由な空間を創出するのに成功しているように思われます¹⁰⁾。宮廷に代表される男性優位の社会に反撥した Sophie はそこから放逐され、ひとり、世界をさまよいますが、失意にある Sophie を支え、苦境からの脱出を助けるのがほとんど女性であるというのは興味深いことです。多くの女同士の友情と連帯が描かれますし、幽閉された彼女に生きようとする意志をかきたててくれたのは幼い少女の無邪気な優しさでした。慈善、博愛活動も財政面は裕福な女性が支えていて、男性には頼らない形で計画が進められてゆきます。そして、支配や権力、陰謀や物欲などとは無縁な、やさしさに満ちた自由な空間をさまよった Sophie が再びもとの世界へと戻ってきた時、小説の最後で、Lord Rich が、友人あての手紙で描いてみせる三人の生活は、単なる田舎での牧歌的生活ではなく、象徴の様相をおびた、一種のユートピア的ヴィジョンになっています。あらゆる信念 (Gesinnung) が必然的に行動となるような世界、領地の農民達と共に Sophie を中心とする一つの女性的ユートピア (eine weibliche Utopie)¹¹⁾ とも言うべき共同体をつくりあげてこの小説は終わっているのです。

この作品の後、ラ・ロッシュ夫人は1807年76歳でなくなるまで、多彩な著

述活動をつづけます。一人の少女が妻となり、母となる中で内面的成長を遂げてゆく過程を描いて女性の発展小説といわれている『ロザリーエの手紙』、新大陸に題材をとったロビンソン・クルーソー風の小説『オネイデ湖畔の出来事』など、小説、物語18編、女性としては珍しい、Bildungsreise の結実である、旅行記、日記5編、回想録4編をあらわし、また、夫が Trier 選帝侯の枢密顧問官の地位について Koblenz 近郊の Ehrenbreitstein に居を定めたときには、一種の文芸サロンを主催し、Wieland や Jacobi 兄弟、Goethe, Merck など若い文人、詩人達がラ・ロッシュ夫人のもとに集まっています。さらに、現実に成功をおさめた最初の女性雑誌と評価されている、『ドイツの娘たちのための Pomona』という雑誌を二年間、独力で発行しました。この雑誌の成功は勿論、彼女の名声に負うところも大きかったでしょうが、男性の手による雑誌にはみられない新しい試みが多くの女性読者をひきつけていました。これまでの雑誌は編者の創作を読者の手紙をよそおって掲載することが多かったのですが、『Pomona』では、実際の読者の投書と、それに対するラ・ロッシュ夫人の返事におおきくページをさき、特集を組んだりして、編者と読者の間に密接な個人的結びつきをつくり出し、ラ・ロッシュ夫人は、『シュテルンハイム嬢』の人気にも比肩するような教育者としての権威を獲得したのでした。

ところが以上のような数多くの仕事の中で後世まで残り、まともに文学作品として正面から取り扱われたのは処女作の『シュテルンハイム嬢物語』だけでした。ことに晩年の彼女についてはしばしば、濫作だとか、説教好きのおばあさんとか揶揄され、Goethe なども、1799年68歳のラ・ロッシュ夫人が Weimar を訪問したとき「彼女はすべてを平準化し、ならしてしまう性格です。低いものを持ち上げ、すぐれたものはひき下げて、そのうえですべてを自分のソースで好みの味にととのえてしまうのです。」¹²⁾と Schiller に書き送ったりしてまともに相手にしようとしていません。彼女には、1780年夫が失脚してから、さらに8年後に夫が亡くなってからはなおさら、家族を扶養するために書かねばならないという経済的な事情もありました。筆一本

で食べていくことは、当時は男性でも作家や詩人達が何らかの官職や教授職につきながら文学活動をしていたことを考えると、容易なことではなかったでしょう。実際、晩年の彼女には書くことはやむをえず果たさねばならない苦役 (Fronarbeit) と感じられたようで親しい友人への手紙にそのような文句が散見されます¹³⁾。『シュテルンハイム嬢』のイメージをくずさず、かつての名声を利用しての教育者の役割に自分を限定して書かざるを得なかったわけです。後の文学史家はおそらく彼女を Wieland, Goethe, Brentano との関係で脇役的存在として扱うだけで、処女作に触れるにとどまっています。Touaillon などもしっかりと、「彼女の芸術的発展はもうとくに終わってしまい、彼女の作品は、いかなる芸術的萌芽も拾いあげることができない、こわばったかたまりになってしまった」¹⁴⁾と、冷徹に言い放っています。しかし、『シュテルンハイム嬢物語』の輝きを思い返すとき、彼女の発展を阻んだものが何だったのかは、もう少し詳しい検討を要することでしょう¹⁵⁾。また、裾野にいる普通の女性読者、教育をもとめている平凡な女性読者を相手に書き続け、ひとりで高みへのぼる道は取らなかった、ラ・ロッシュ夫人のありかたと仕事とは、美的に自立した作品とは違った側面からの検討も可能なのではないのでしょうか¹⁶⁾。

註

- 1) Christian Fürchtegott Gellert: *Leben der Schwedischen Gräfin von G.*** (1747-48) Ch. F. Gellert Werke Bd. 2. Hrsg. von Gottfried Honnefelder, Frankfurt. a. M. 1979.
- 2) Vgl. Jürgen Habermas: *Strukturwandel der Öffentlichkeit, Untersuchungen zur einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft.* Darmstadt und Neuwied. 1978. s. 60ff. 邦訳: 『公共性の構造転換』細谷貞雄訳 未来社 1973.
- 3) C. F. Gellert: *Praktische Abhandlung von dem guten Geschmacke in Briefen.* (1751) a. a. O. s. 137ff.
- 4) Silvia Bovenschen: *Die imaginierte Weiblichkeit. Exemplarische Untersuchungen zur kulturgeschichtlichen und literarischen Präsentationsformen des Weiblichen.* Frankfurt a. M. 1979. s. 200f.
- 5) Christine Touaillon: *Der deutsche Frauenroman des 18. Jahrhunderts.*

Faks.-Dr. d. Ausg. d. Braunmüller-Verl., Wien, Leipzig 1919. Bern, Frankfurt a. M. Las Vegas, 1979. s.66.

- 6) Sophie von La Roche: *Geschichte des Fräuleins von Sternheim. Von einer Freundin derselben aus Original-Papieren und anderen zuverlässigen Quellen gezogen.* Herausgegeben von C. M. Wieland. 1771.

現在入手可能なテキストとしては、

- (1) *Geschichte des Fräuleins von Sternheim.* Hrsg. von Fritz Brüggemann. Leipzig, 1938. (Deutsche Literatur. Sammlung literarischer Kunst- und Kulturdenkmäler in Entwicklungsreihen, Reihe Aufklärung, Bd.14)
- (2) *Geschichte des Fräuleins von Sternheim.* Vollständiger Text nach der Erstausgabe von 1771. Textredaktion: Marlies Korfmeier. Mit einem Nachwort, einer Zeittafel und Bibliographie. Hrsg. von Günter Häntzschel, München 1976 (Winkler-Fundgrube, Bd.56)
- (3) *Geschichte des Fräuleins von Sternheim.* Hrsg. von Barbara Becker-Cantarino, Stuttgart (Reclam) 1983 (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 7934)

の三種類あるが、作品からの引用は (2) によった。

- 7) *Frankfurter Gelehrte Anzeigen* Nro. XIII den 14. Feb. 1772.
この評論は、Goethe の手になるものか Merck によるものかはっきりしない。このころの雑誌の主幹は Merck であるが、論評は互いに親しくまた同じ立場に立つ寄稿者たちの共同作業のような形で書かれ、しかも匿名で発表されているため、文学的にも、世界観的にも、文体上にも一致が生じ、後から論者を特定するのが不可能になっている。
- 8) 特に J. M. R. Lenz は強く Wieland を批判し、「あのばかげた註ほど腹立たしいものはありません。あの註はいつも、私のこよなく至福な感情を、まるで冷たい水をぶっかけるように中断してしまうのです。」(Lenz an Sophie von La Roche am 25. Juni 1775) と手紙に書いたりしている。
- 9) Bernd Heidenreich: *Sophie von La Roche-eine Werkbiographie*, Frankfurt a. M. 1986. s.19.
- 10) 社会史家, Karin Hausen の論文 (*Die Polarisierung der "Geschlechtscharaktere"-Eine Spiegelung der Dissoziation von Erwerbs- und Familienleben.* in: *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas.* Stuttgart, 1976. s.363ff.) によると、男女特性の相違を、自然によって本来的に定められたものとして、図式的概念が用いられたのは、1760年以降のことで、それ以前は階層や社会的地位によりなされた女性についての定義が、この頃を

境として、女性一般のものとしてなされるようになったという。「全き家」から「市民的家族」の形成という家族形態の歴史的変化にともない、女性を結婚、家族、子供の領域へ囲いこむことが必要となり、そのために女性の「性」特性の強調、それを内面化するための女性教育がもたらされたのである。ラ・ロッシュ夫人の仕事は、上層市民層の妻、娘のモデルを描き続けることで、この時代の要請にびったりと添っていたといえるだろう。そしてまた、『シュテールンハイム嬢物語』（1771）は年代的に眺めれば、はしりともいえるものであり、それ故に後の仕事にはない輝きを定着できたのかもしれない。

11) Nachwort von Barbara Becker-Cantarino. a. a. O. s. 415.

フェミニズムの視点からこの作品を論じた、Ruth-Ellen B. Joeres も結末のユートピア的性格を指摘し、Sophie の結婚が、相手の中に吸収されることに意義を見いだすものではなくて、むしろ、Sophie が有用な活動をさらに続け、女性たちに向かってのはたらきかけを許容するものであるという点に注目している。（Ruth-Ellen B. Joeres, übersetzt von Sabine C. Franzen und Gerhard Seidel: *“Das Mädchen macht eine neue Gattung von Charakter aus!” Ja, aber ist sie deshalb eine Feministin? Beobachtungen zu Sophie von La Roches “Geschichte des Fräuleins von Sternheim”* in: *Frauen in der Geschichte VI* Hrsg. von Ruth-Ellen B. Joeres, Annette Kuhn. Düsseldorf, 1985.

また、結末の“三人世帯”の構想は、ルソーの『新エロイズ』におけるジュリーを中心としたクララン農園が意識されている。ラ・ロッシュ夫人は Julie Bondeli との文通で遅くとも1762年以来ルソーの作品を知り、彼に強く傾倒していた。なお、『社会契約論』の〈スパルタ〉的ユートピア、男性的ユートピアに対する、クララン農園の女性的ユートピアの性格については、作田啓一：『ジャン・ジャック・ルソー、市民と個人』人文書院 1980 を参考にした。

12) Goethe an Schiller, 24. 7. 1799.

13) 例えば、Sophie von La Roche an Georg Wilhelm Petersen 19. 4. 1800. または Sophie von La Roche an Sophie von Pobeckheim 21. 6. 1800. など. Michael Maurer (Hrsg.): *Ich bin mehr Herz als Kopf, Sophie von La Roche, Ein Lebenbild in Briefen*. München, 1983. s. 378.

14) Touaillon, a. a. O. s. 174. Touaillon のこの著作『18世紀のドイツの女性小説』は、18世紀に多数輩出しながら、文学史の網の目からこぼれおち、忘れられてしまった女性作家たちを丹念に拾いあげ、跡づけ、分析した画期的な労作であり、著者は、ラ・ロッシュ夫人に大きく章をさいてその先駆的役割は高く評価している。

- 15) 例えば Bovenschen は、ラ・ロッシュ夫人が自分の創造した *empfindsam* な主人公 Sternheim のイメージから自由に自由になり得なかったことにその原因を見て、「……例えばゲーテは ヴェルテルと 同一視されることには抵抗してヴェルテル像から自由になることに成功したのに、ラ・ロッシュ夫人は後に彼女が何を書こうと、いつもシュテルンハイム嬢でしかなかったのだ。……できあがったモデルに合わせることを強いられたために、自分の仕事及び文化的発展との対決が不可能になったのである。男性の同僚の多くはそういうつらい対決によって<新しい岸>へと達することができたのであるが」と書いている。Bovenschen, a. a. O. s. 199.
- 16) ラ・ロッシュ夫人の生涯を書簡で再構成した Maurer (註 13 参照) は、「善と美、ゾフィー・ラ・ロッシュの再発見」と題する論文で、例えば、読者と文学マーケットとの関連から、あるいは Trivalliteratur の流れにおいて、また美と倫理の問題、そして文化史の豊かな資料として彼女の業績を見直すことを提起している。Michael Maurer: *Das Gute und das Schöne, Sophie von La Roche (1730-1807) wiederentdecken?* in: *Euphrion* Bd. 79. 2. Heft. 1985. s. 111ff.

その後、彼女の全体像に迫ろうとするものとしては、ラ・ロッシュ夫人の個々の作品も仕事の全体も伝記的関連から切り離しては論じられないと、*Werkbiographie* という観点からとりあげた、Bernd Heidenreich の研究 (註 9 参照) と、広く歴史的社会的背景を含めて彼女の業績を包括的に論じた Ingrid Wiede-Behrendt の研究のあることを付け加えておきたい。(Ingrid Wiede-Behrendt: *Lehrerin des Schönen, Wahren, Guten. Literatur und Frauenbildung im ausgehenden 18. Jahrhundert am Beispiel Sophie von La Roche*. Frankfurt a. M. 1987.)

(附記：本稿は1987年1月18日に行われた阪神ドイツ文学会第121回研究発表会のシンポジウム「自己表現の諸相—1771年から1835年までの女性の文学活動について」に於いて『先駆者ラ・ロッシュ』として口頭発表したものである。)